

## 音のサロン委員会（旧專業部会）

音のサロン委員会担当 理事

アキュフェーズ株式会社

高松 重治

### 「音のサロン委員会」の成り立ち

2011年10月開催の音展(オーディオ&ホームシアター展)でのイベント「音のサロン」は本来のオーディオを一般ユーザーの皆様にお聴かせすることを目標に企画したところ、連日のお客様動員数から分かるように大成功裡に終わることができた。

一度はビジュアルに占領された業界地図のオーディオも漸く回帰し、お客様が「もっと良い音を聴きたい」という現象に他ならない。年一回のイベントだけでは勿体ない、あらゆる角度からオーディオ活性化を念頭に置きお客様をサポートする方法はないか、旧專業部会参加各社で検討を重ねた。

日本オーディオ協会(以下協会と略す)に於いて「專業部会」だけが活動名ではなく、集合名であるため他の委員会名とは違和感があった。そこで好評であった「音のサロン」を組織の冠にした委員会とし、活動をユーザーに「音を聴いて戴きたい」という強い願望が込められている。そしてこの名称が晴れて協会の総会において承認を受けた。本文では專業部会時代からの活動検討を音のサロン委員会として報告したいと思う。昨年の活動の詳細はJASジャーナル2011年9月号(Vol.51 No.5)「JAS委員会レポート」にJASの渡邊哲純さん(元日本ビクター)が著わされているので参考にして欲しい。なお本稿が渡邊さんの記事との重複部分をお許しいただきたい。

音のサロン委員会参加企業(五十音順)はアキュフェーズ株式会社、オンキヨーマーケティングジャパン株式会社、株式会社クリプトン、CEC株式会社、ティアック株式会社、株式会社ディーアンドエムホールディングス、株式会社トライオード、フォスター電機株式会社、富士通テン株式会社、ヤマハエレクトロニクスマーケティング株式会社、ラックスマン株式会社の11社である。文中では正式名称ではなく略称を使わせて戴く。

### 活動方針

故事「毛利元就の三本の矢」ではないが、小さい組織が集まって大きな事を成し遂げたいという校條会長の方針と、渡邊哲純さんの強力なサポートがあったからこそ「音のサロン委員会」が実現していることを特に申し上げる。

昨年の音展終了時点から直ちに「鉄は熱いうちに・・・」ということから新しい活動を開始。参加企業には大変な負担にはなったが、

1. 年一回の「音展」イベントだけではなく恒常的に試聴会が出来ないか。
2. ユーザーの知りたい技術を伝えるには。
3. オーディオの技術向上に努めるには。

の3点に絞られ検討を重ねてきた。

まず「音のサロン」と「PC オーディオ」の二つのWG (Working Group) を立ち上げ活動を開始し、会議数は昨年11月から今年7月までで15回にも上るハードスケジュールをこなしていった。

### 音のサロンWG (主査：ラックスマン小嶋 康さん)

その名の通り委員会名を頂いた名称であるが、オーディオ本来の「音」を聴いて戴く事を旨とした。よって音展でのイベント名のみならず開催される試聴会は「音のサロン」と称することになる。「音のサロン」参加企業各社に於いては、自社で催される試聴会には手慣れており、比較的手際が良く、何をお客様に訴えるかも知り尽くしている。これらのノウハウをこの音のサロンに生かしてゆけば、オーディオ業界の意志が表れ、理解が深まり、オーディオを廃れさせないことになると思う。

昨年の音展での「音のサロン」に於いてのイベント風景を参考にしていきたい。この共同イベントは5つの価格ランクに分けられたメーカー入り乱れての組み合わせになり、依っての講師の後ろには参加メーカーの多くのスピーカーが散見できる。限られた時間内に組み合わせセットを素早く入れ替えた。

会場づくりには限られた会議室を如何に試聴に適合させるかにも腐心した。参加メーカー(ヤマハ)から高価な音調パネルの提供と設置を受けたことを特筆しておきたい。



2011年音展「音のサロン」共同イベント風景、  
講師は評論家の麻倉怜士さん



60席を超えて多くの人が立ち見(聴き)席

講師のお話のレベルの高さも然る事ながら、聴衆写真を見て分かる通り用意した60席を超えて多くのユーザーが聴き入っている様から、如何にこの類のイベントへの関心の高さを窺い知ることができた。これによって大きな会場をと誰しもが考える事だが、会場を大きくすることによる音響的な部分が失われることになり、精々この程度が最大と考える。

このイベントでは11社が結束しての試聴会であったため、各社の機器を入り乱れて接続することができ、ユーザーにとってもメーカーにとっても、またとない試聴会になった。この形態は

暫く続けて行きたいと考えている。

写真紹介以外のイベントでも高音質配信音源、PC オーディオ、高音質ディスク(レコード協会)、アナログレコード、真空管オーディオ(真空管オーディオ協議会主催)、大学生による試聴会等、多岐に亘ってユーザーが知りたい、聴きたいであろうことを周到に用意し、参加メーカー全社で知恵と力を出し合って開催できたことに、ここで改めて参加メーカーに感謝申し上げる。

さて音展以外の「音のサロン」試聴会として、対象者、開催時期、開催場所、開催内容、共同開催等、種々検討を重ねた結果、概ね次のような事を予定し、開催に向けて着々と進行している。当初、経費節減の折、会場を協会会議室使用やレコード販売店との共同イベントを考えたりしていたが、協会渡邊さんから千代田区管理の日比谷図書館の小ホール(日比谷図書文化館)を使用した日本オーディオ協会と千代田区との共同イベントが提案された。楽曲ソース提供も考慮し、日本レコード協会にも加わっていただき、三組織の共催で凡そ年4回(春夏秋冬)の開催を予定している。

現在までに決まっている内容は

第一回：9月「ビートルズを聴く」

第二回：11月「音楽の歴史」

第三回：2013年2月「90年代のJ-ROCK」

第四回：2013年5月「ジャズ入門講座」

これらは千代田区側が区内の文化的な催事意向と相まって、音のサロン委員会側との方針が合致したことによる。最大の難関は広報活動であり、ある程度千代田区側が行うのでどんな客層が集まるかが危惧するところであるが、協会としても積極的に行いたい部分である。

### PCオーディオWG (主査：クリプトン渡邊 勝さん)

現在のディスク・メディアの販売数量が世界的に減少していることに危惧し、在来のメディアを否定せず且つ新しいメディアの台頭を尊重する姿勢、オーディオを新しい方向でもフォローすることを主眼に考える。

いま旬であるところのディスク・メディア以外の音源はネットワークからのダウンロードが中心となるが、媒体としてPCを使用するオーディオやUSBメモリー、ネットワーク上のストレージであるNAS(Network Attached Storage)を使用する方法などを、一般ユーザーに知らしめることを中心に、初歩的なレクチャーすることを目的とする。

音のサロン委員会参加メーカーの中に、ネットで音源供給しているオンキヨー、クリプトンがありこの二社が中心となって「PCオーディオ入門講座」を企画し、既に二日間・四回の講座を終了した。

広報活動としては一部の雑誌社と協会のホームページであったが、協会HPの募集開始一日で定員に達したことは、如何に関心が高いかを如実に示している。本稿出稿以降あと二日の開催を予定している。講座終了後にはアンケートを実施し、ユーザーのレベル・関心度などを調査しているが、ユーザーの使用機器範囲が広くパソコンOSを変えた講座やもう少しハイレベルなものなどの要望があることを今後の実施内容に反映させてゆくつもりである。



PC オーディオ入門講座 (6月15日に開催された第二回目午前の部) 協会 7F 会議室

#### 【解説】

CD プレーヤーでは決まったフォーマットでメディアをロードし、復調することを一つの閉ループで行ってきたのでユーザーは大変に安全であり楽であったが、決まったフォーマットを持たないダウンロード・メディアでは、何でもありの世界である。然るにネットからのダウンロードから始まり、保管するストレージ、復調するソフトウェアの選定、はたまた DA コンバーターなどと組み合わせは千差万別になり、選択肢が増えユーザーの楽しみが増えたわけである。しかしながら逆の見方をすれば、慣れないユーザーにとっては混乱の極みである。同時に制作する側はそれこそ大変(ダウンロードであればモノのカタチは無いので大きな損失にはなるまい)。ビデオのように方式競争に陥り、同一ソースでありながら多方式メディアとプレーヤーを発売したように、結局はユーザーの損失になることだけは防がなければならない、またぞろオーディオが難しくユーザー離れにならないように気を配らなければなるまい。

### 第三番目のオーディオの技術向上について

協会では 2004 年に開催された「JAS コンファレンス」を最後に、それまでほぼ 2 年おきに行われてきたことが自然消滅して今日に至っている。理由は定かではないがオーディオ斜陽で技術がビジュアル関係に費やされてきたものと思われる。これを境にオーディオが低迷し始めている。

立て直しとまでは行かずとも技術を共有し、例えばネット・オーディオなどは各企業で発表し合い、良い意味での競争をユーザーにも知らしめ、現在オーディオ業界はどういう方向に進んでいるのか、また進んでゆくのかを公表し、色々な方式が出てきて権利主張もあろうかとも思うが、綺麗事では自然淘汰、悪い意味ではユーザーを犠牲にして市場を形成することからは脱皮すべきであると思う。決してメーカー同士の話し合い(談合)ではなくユーザー保護の意味から申し上げたい。よって従来行われてきた JAS コンファレンスは参加企業向けではなく一般ユーザーにも聴講できるように、音展での開催を進めると良い。そしてハイレベルではなくユーザーの実際の製品の購入にも生かされるような内容を考慮すべきと考える。

これらは音のサロン委員会のみでは出来ないので、協会全体として今後考えて行くべき方向である。